郷土史 ていね

第 56 号
平成 24 年 8 月 8 日
手稲郷土史研究会会報

第 75 回（平成 24 年 7 月 11 日）定例会の講演要旨

軽石軌道と石狩鮭漁（その1）

石狩市郷土研究会　　吉岡玉吉氏（稲穂在住）

1．石狩浜の鮭の歴史を訪ねて（呼称に関わって歴史を話されましたが詳細は紙面の都合で割愛させていただきます）

石狩十三場所、1700（元禄 13）年、石狩川支流の雨龍川の雨竜町から石狩川河口までの間に 13 箇所のアキアジをとる場所があった。明治の初期になって漁獲量も少なくなり、また他の歴史的事情もあり廃止になった。

鮭の学名はサケ目サケ科、シロサケ、鮭、鮏であるが、その呼び方はいろいろある。ここでは石狩浜での呼び方を紹介する。

アキアジ（秋味）、アキヤジ（ズ）、ブナ（山手樺）、ブナケ（山手樺系）、ギンケ（銀系『毛』）、ハナマガリ（鼻曲）、カノ（雄のサケ、マス）、ピン（一本にならないサケ『ピンコ』）、ホッチャレ（穂放れ）。

石狩浜では季節によって呼び方が異なっていた（昭和初期後は使われなくなった）。ハシリザケ（走り漁）：9 月上旬から 10 月下旬までに獲れる鮭。ゴトリザケ（後取り漁）：11 月中旬から 12 月にかけて獲れる鮭。ハナマガリ（鼻曲り）：10 月中旬から 12 月に獲れる鮭。ハエノコサケ（ハエの子魚）：10 月中旬に獲れる鮭。

2．馬鉄の体験

「馬鉄」は通称で、石狩町誌に記載されている運用会社の名称から推測すると「軽石軌道」が正式名称と思われる。他の資料には「軽石馬車軌道」「軽川軌道」「馬車鉄道」とも書かれている。この「馬車鉄道」の略称として一般に「馬鉄」と呼ばれるようになったのであろう。

停留所は軽川駅から花畔駅まで、「新川」「南四線」「南七線」「南九線」の 4 つの停留所があった。その線間は 300 間（約 540m）であるから、1km 余りの間隔で停留所があったことになる。会社が営業は 1921（大正 10）年から 1936（昭和 11）年となっているが、実際の運行は 1635（昭和 10）年までだったように思われる。

客車は 1 日 3 往復、片道 40 分～60 分で運行、オープンデッキの二輪車、運賃は 35 銭（60 銭だったという証言もある）。貨車は無蓋車。馬は軌道会社に頼まれ（軽川）近くの人 12、3 人で『馬車組合』をつくり、客車班と台車班（貨物を運ぶ）に分かれていた。

沿線には、『前田農場』の約 400ha の農地・放牧地、『町村牧場』所有地約 112ha。『極東煉乳株式会社』の「花畔集乳所」などがあった。途中の人家は数える程度であったが、花畔の市街地に約 40 戸の民家が密集し、サケ漁の漁夫、旅芸人で秋口は賑わった。

第二期線として、花畔ー石狩間の構想があり、石狩街道沿いに路床が敷かれ、石狩町大字親船町に駅舎も建てられた（内装途中で中断）が、第一期線の不振によりまぼろしの軌道となってしまった。

この駅舎は、小学 2、3 年生頃、恰好の遊び場だったそうです。　　（文責：小田）

第 75 回（平成 24 年 7 月 11 日）定例会の研究発表要旨

「光風館に関わるあれこれ」について

稲穂　　上仙　学　氏

1．光風館について

(1) 所在地　　手稲区富丘６条３丁目１

(2) 開業　　明治 25 年～昭和 16 年に閉鎖
　　小樽の東幸三郎が経営

(3) 概要

ア．明治 25 年温泉旅館として開業する。建物は竜宮城にたとえられるほど豪華絢爛の高級温泉料亭であった。国道から石畳の舗装道路で、春は両側に桜並木、夏はスズランと四季折々の景観で賑わった。

イ．光風館が全国的に知られたこと

スズランの可憐な姿が見られたこと、尼港事件に関連した「江連力一郎」という海賊が泊まったことである。

2．手稲の最初の温泉宿

手稲での最初の温泉宿は「藤廼舎鉱泉」だ。村上藤吉が商業を営んでいた父親の死後、豊平川上の温泉場の湯番として仕事を始めた。その後、明治 7 年に軽川に藤廼舎鉱泉を始める。軽川に移住したのは明治 5 年頃であったようだ。

3．高松宮妃殿下と光風館

昭和の初期、高松宮妃殿下がまだ徳川喜久子姫（昭和 5 年に 18 歳で高松宮妃となる）が学生時代の夏休みに光風館で過ごされた。

手稲の名士近藤新太郎が以前八雲の徳川農場の支配人であったことが関係している。

※　徳川農場

尾張徳川家が胆振国山越内村字遊楽部に開いた農場。明治 11 年旧藩士授産のため未開地 500ha の下付を受けて、徳川家開墾試験場を設け家族移住して、八雲村を開き開墾に励んだ。その後諸制度の改革を行い、大正元年に旧藩士 75 戸を独立させ、残地の小作人を中心に小作農業を経営することになり、「徳川農場」とした。

4．江連力一郎と尼港事件 ～ 海賊

尼港事件、シベリア出兵中、サハリン北部対岸ロシア、アムール川の河口近くの港にニコラエフスクを占領していた日本軍は、大正 9 年バルチザンとの衝突により尼港の 700 余名の日本軍隊及び慰留民が殺害された。

このことに対して江連力一郎は義憤し、その報復手段として、ロシアの船が出ると、それを襲いロシア人を甲板に並べ全員の首を切った。船に積んであるものをかっさらう海賊となった。その後稚内に船を乗り捨て逃亡する。逃げ回った末、大正 11 年 12 月光風館に愛人と潜むも、軽川駅で逮捕された。

次回の予定

次回（9 月 12 日）は、石狩尚古社館長の中島勝久氏の講演「石狩尚古社と井上伝蔵」と濱谷義昭会員の「小さい頃の軽川」の発表を予定しております。

会場は、視聴覚室です。